

はたけの家

ひとつひとつがつながり、思いやりをはぐくむ共助社会づくり

はたけの家
から

とつてあきの1枚



23号 目次

column

- 出会う・つながる・学び合う

support

- サポーター会員募集中!!

event

- 秋のコンサート開催

- こもんの家カフェ

- 洋服プロジェクト！

命は所有物ではない

水野 英尚

「7歳の娘は宝物だった…」、今年1月に人工呼吸器で命を繋いでいた我が子（心菜さん当時7歳）の呼吸器を、故意に外して死亡させた母親が、逮捕された後に裁判で語った言葉です。なぜ懸命に生きる我が子の命に寄添い続けてきた母親が、「宝物」であつた我が子の命を奪つてしまふ行為をしてしまつたのか、私たちに大きな「問い」を投げかけている事件であると思います。

福岡市では、この痛ましい事件をきっかけに、同じような境遇にいる「医療的ケア児」の現状を調査し、本人や家族の支援体制を見直すための協議会や部会が立ち上がり、私もメンバーとして加わっています。 調査結果を見ますと、民間や行政における支援サービスの量・質共に、数年前と比較して十分とは言えませんが大きく改善されています。現に、事件当事者の家族も在宅支援をかなり利用していました。ですが、支援者たちにとつても「母の話を聞いていれば」とか「もつと寄添つていれば」等々、心を痛めている人が多くいます。

私はこの事件の根幹にあるものは、福祉制度や支援体制が云々といふより、もっと人間として命の部分を問うている事件だつたのではない、そう感じています。つまり、重い障がいを負い、医療ケアが濃厚という過酷な生を受けて生きる命は、当然、医療の力、福祉の力、そして何より家族（母親）の力が無ければ、1日として生き延びることができなかつた命であつたことでしょう。

しかし、そこで1番大切な事、何より大切なことは、その命はその本人が生きる命、7歳の心菜さんが生きる命であつて、他の誰か（たとえ本人であつても）がそれを遮つたり、閉じたり、奪つたりすることをしてはいけないのだという事です。どのような命でも、それを肯定する事が大切なのだと思うのです。事件を起こした母親にとつて「娘は宝物だった」のです。本当に大切な存在であつたことでしょう。しかし、娘は母の所有物ではない、その命は所有物ではない。誰かの判断（無理・無駄・諦め）によって、生きることを終えるなんてことは、どのようないふ場合もあつてはならないのだと

心菜さんのように、重い障がいゆえに、自分の考え、自分の想いを伝えることの困難な人たちがいます。ともすれば親が、あるいは支援者が、そうした彼・彼女たちの人生の全てを握っているかのような、振る舞いがなされていないでしようか。

親たちは「私がいなくなつたらこの子はどうなのだろう？」と未來の不安を吐露しますが、それは「ケアの担い手」としての心配なのか、「命の担い手」としての不安なのか、もし後者であるのならば、急がなければなりません。「あなたがその命を抱つていいのではない！」と伝えること、そして、それが実感できる「場」（生活または地域）を創ることが急務であると私は思います。一つの命は別の命を支え、支えられた命がまた別の命を支える。それが、小さな7歳の命を通して、私が教えられていることです。

column 出会う つながる 学び合う



column



event



秋のコンサートを開催



先日(10月29日)、「ゆうなの木」によるライアーライブと「山の音楽家Shana」によるオカリナとギターの演奏が、今年オープンした「こもんのいえ」を会場にして開催されました。心の優しさを引き出すその音色は、会場に集まった人たちを魅了していました。また、「こもんのいえ」の目的や今後の展開について説明がされると、多くの人たちから励ましや賛同の声を頂くことができました。以下、アンケートの一部をご紹介します。

＊応援しています！大切な場所だと想います。

＊年老いた親は息子たちのケアをするのは大変です。はたけの家の生活とても助かっています。[こもんのいえ]を利用して、ありがたさを感じてもらいたいですね！！！

＊施設と違い、住み慣れた地域で暮らすことの大切さを改めて考えるきっかけになりました。困難な問題が多数出てくると思うのですが、不可能と思われていることを可能に出来るという思い、そして可能にされているのが素晴らしいことです。

＊"素晴らしい取り組みだと思います。病気や障がいがある方だけの問題ではなく、私たち一人一人の考えるべき問題だと思います。

＊この取り組みが一人でも多くの方々に伝えられますようにと思います。

＊『こもんの家』の趣旨をご理解された、ステキなご家族仲間で満室になることを願っています。

＊実家を離れて自立して、次に進むステップとなる、より良い居住空間になるように願っています。

event 毎月第2・4水曜500円ランチ開催中！



コンサート開催日はカフェも同時開催



support



サポーター会員募集中!!



【振込み先】
ゆうちょ銀行 店名：七四八
記号：17440
口座番号：89850401
口座名義：トクヒ ミンナノプロジェクト

◎ご寄付をいただきました！

(2025年7月～10月)

小川 達也様

堀川 久美様

河村 富美子様

田代 美香様

三浦 浩子様

中尾 えがお様

尾崎 真理様

島本 桂代様

和田 節子様

福井 幸恵様

荒 隆英様・桃子様

倉光 陽大様

野口 幸弘様

野上 小百合様

西田 恵利子様

和田 淳様



洋服プロジェクト

event

私の暮らし方を自分たちが決めていく —自分の「好き」を選べる服を、すべての人に—

私の暮らし方を、自分たちで決めていく。
—自分の「好き」を選べる服を、すべての人に
「今日はこの服を着て出かけよう！」
そんな小さな選択ができるることは、
実は、とても大きな“自分らしさ”的表現です。
でも、身体に障害のある人たちにとっては、
その「服を選ぶ自由」が制限されてしまうことがあります。

たとえば、こんな悩みがあります。

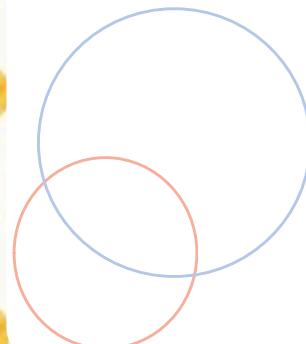
■ 気管切開をしていると、カニューレが抜けてしまうのが怖くて、前開きの服しか着られない。

■ 上肢の拘縮や側弯があると、脱ぎ着のたびに痛みを感じるため、柔らかい素材しか選べない。

感覚が過敏な人は、肌触りを優先するあまり、好きなデザインを諦めてしまう。

■ 胃瘻から食事をとる人は、お腹を出さないといけない服が多く、外出先では抵抗を感じる。

◆ 人工肛門（ストーマ）を持つ人は、締め付けない服を選ぶとデザインが限られてしまう。



▲ 大坪 ゆきさん
(試作したチユニックを試着しています)

前かけ部分をめくると、
「胃ろうの窓」が
出でます♪

NPO法人みんなのプロジェクト季刊誌
はたけだより

ひととひとがつながり、思いやりをはぐくむ共助社会づくり

NO.23
2025秋号



◎ 発行 2025年11月 ◎ 発行元 NPO法人みんなのプロジェクト

〒814-0172 福岡市早良区梅林6-23-3 TEL:092-874-3051 FAX:092-874-3052

◎ 公式サイト <https://minnanoproject.org/> ◎ メール : hatakenoie2020@gmail.com

